

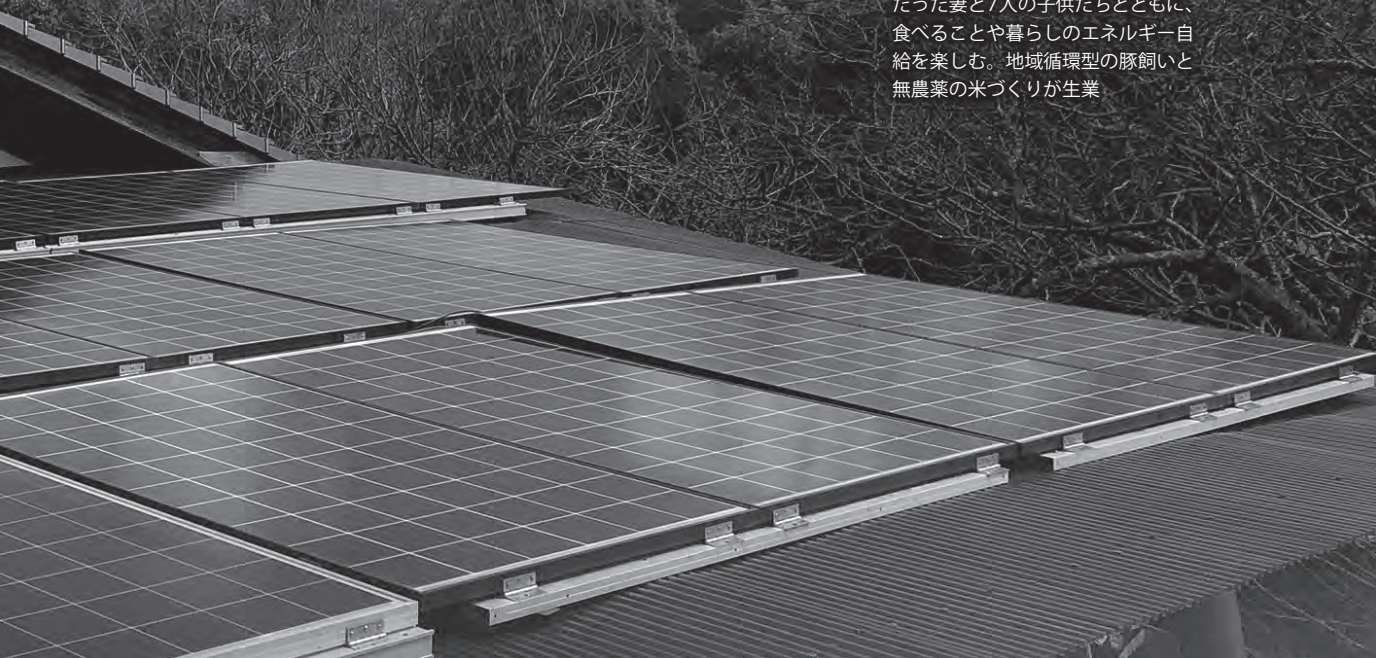
全力でエネルギー自給生活！

ガソリン代も電気代もガス代も かからない暮らしは最高だ

坂本耕太郎 (広島県三原市・桜の山農場)



左端が筆者 (42歳)。高校の同級生
だった妻と7人の子供たちとともに、
食えることや暮らしのエネルギー自
給を楽しむ。地域循環型の豚飼いと
無農薬の米づくりが生業



エネルギー自給は 平和に通ずる

私が農業を志したきっかけは、日本で唯一有機農業を教えてくれる三重県の愛農高校に入学したことでした。私の両親は有機農業を営んでおり、幼い頃から農に触れて育ってきました。高校2年生の時に養豚と出会い、将来は豚飼いとして生きていきたいと決意。高校卒業後7年ほど各地での研修を経て2006年、25歳で結婚と同時に実家の山の農場の一角を借りて就農しました。

私たち夫婦がエネルギーの自給に意識を向けるきっかけは、農場をつくっている時に「平和について考えるとエネルギーにたどり着く」という言葉に出会ったことです。「世界で起こる戦争や紛争は、石油や石炭、天然ガス、水、それらを運ぶパイプライン上で起こっていることが多い」と続くその言葉に衝撃を受けました。農に生きる者として自分たちの食べる物の自給は目指していましたが、暮らしのエネルギーも自給することが、自分たちにできる平和活動なんだと確信しました。

冬でもお風呂が沸く 真空管式太陽熱温水器

エネルギー自給の最初の一步はお風呂でした。06年、私たちの暮らした山の農場に建った一軒家を借りてリフォームするところから始まりました。山の家にはお風呂がありませんでしたので、ユニットバスを購入するまでの間に合わせのつもりで直焚きの五右衛門風呂をつくりました。しかし、直焚きのお風呂のあまりの気持ち良さに魅せられ、ユニットバスを購入するなんて選択肢はあつという間に消えてしまいました。

お風呂焚きは、子供たちの仕事としてもとても意義深いものです。毎日暮らしの中で子供たちも参加できる仕事があることは貴重ですし、火を扱う技術も自然に身につきます。ただし、お風呂が沸くまで2時間かかり、寒くなるにつれてお風呂に入れる日は自ずと少なくなっていました。

そんなお風呂ライフが19年に大きく変化しました。それは真空管式太陽熱温水器を導入したからです。それまでも廃棄された太陽熱温水器をもらって屋根に設

